（第３種郵便物認可）　（毎週水曜日発行）

静脈産業の現在地と未来

資源循環ネットワーク　彌永（やなが）　冴子（さえこ）

（1）

アートと製錬と不法投棄の歴史を身近に感じて

経済活動の在り方が今、問われている

――朝6時。「ボーッ」という船の汽笛が、静かな島内に響き渡る。爽やかな海風を求めて散歩に出かけると、港にどっしりと鎮座する、赤い水玉模様のかぼちゃに出くわす。近くにはユニークで魅力的な形をした椅子が並び、ついつい座ってしまう。港から砂浜の方へ歩を進めると、道中にカラフルなオブジェや、白く美しい幾何学的な形の美術作品が並び建ち、ついつい立ち止まって眺めてしまう――。

私の住む、ここ香川県直島は、アートの島として有名だ。島内を歩けばたくさんのアートに出会うことができる。クロード・モネの絵が楽しめる地中美術館には、連日海外からたくさんの観光客が訪れる。一方で、山の方へ目を移すと、巨大な機械や装置が建ち並ぶ工業地帯へと、島はがらりとその表情を変える。なかでもひときわ重厚な存在感を放つのが、銅製錬所だ。廃棄物関連で直島と言えば、わが国最大と言われた、豊島有害産業廃棄物不法投棄事件で、廃棄物を処理した地としても有名である。

豊島は、直島から船で20分程の距離にある。先日、豊島の不法投棄跡地へ赴き、当時事件に直接関わっていた方のお話を伺った。廃棄物の撤去を求める住民運動に身を投じ、事業者、行政と闘った記録を聞くと、現状のごみ行政に、資本主義の経済構造に、「このままでいいのか？」という疑問が生じずにはいられない。

さて、ここで誠に僭越ながら、連載初回ということで、少しだけ私の背景に触れさせていただきたい。環境問題への関心は、リオで開催された環境サミットで、当時12歳の少女が環境問題の重大性を訴えたスピーチを記した本、「あなたが世界を変える日」を読んだことに始まる。子供心ながら、衝撃と焦り、「環境問題をなんとかせねば」という使命感を感じた。就職活動の時に環境NGOなども視野に入れたが、資本主義の世の中、まずはビジネスを学ばねばと、食品メーカーへ入社した。研究開発職を経て、南米の国で約1年間、コーヒー農家の方と協業する機会を得た。暮らした村では自分の手で鶏を捌き、アマゾン川に潜って魚を捕って食べた。自然と共存する原始的な生活をしているからか、現地の人は自然を敬い、感謝していた。滞在中、ある人が言った「土からもらったものは、全て土へ還すのが道理だ」という言葉にハッとする。

日本で研究開発していた際、最優先していたのは「お客様のニーズ」と「価格」であった。自然や人権に配慮した原料を使うことよりも、「お客様はお金を払ってくれるのか？」が重視された。企業の第一使命はお金を稼ぐことと頭で理解しつつ、「本当にそれでいいのか、何か根本から変えるべきなのではないか」という想いが悶々と頭を巡った。そこから、メーカー（動脈産業）ではなく、静脈産業へ移りたいと思い立ち、現在に至る。

世界規模で起きる気候変動、資源枯渇等の課題に直面する中で、リサイクル、資源循環分野への期待は日に日に高まっている。サーキュラーエコノミーへの転換は必須であり、これまでの経済活動そのものの在り方が、今、問われている。そのような流れの中、静脈産業は今後、新たな市場を創造し経済を牽引していく主役となるだろう。本連載では、製錬所とアートと、産業廃棄物不法投棄事件の歴史を身近に感じる、ここ直島から、動脈産業と静脈産業両方での経験を生かし、静脈産業の現在地と未来について深掘りしていく。

豊島有害産業廃棄物不法投棄現場の一部
2023年8月26日　筆者撮影